



『福祉国家』から『福祉世界』へ —社会福祉学研究の帰結として—

大学院 人間生活科学研究科 教授 **星野 政明**

私が社会福祉学を志したのは、偶然ではなかったような気がします。私の叔父は視覚障害者でした。叔父を盲学校に通わせるために、戦中のことですので祖父母や父母は随分と苦勞を重ねていました。その姿をとおして、今になって思えば「福祉の精神(スピリッツ)」を教えられてきたと言えるのかもしれません。

私が福祉系大学に進学を決めたのは、昭和30年代でした。草創期でしたので、福祉系の大学についての認知もほとんどなく、社会の関心も貧困問題を中心とした慈善的な発想が主流でした。それから40年余が過ぎて、時代は大きく変わりました。社会福祉がこれほどまでに社会のメインテーマとなるとは誰が想像したでしょうか。社会福祉関係学部・学科をもつ大学・短大は優に100を越え、国家資格は「社会福祉士」「介護福祉士」「精神保健福祉士」などの専門職制も次第に整備されてきました。福祉関連法もまた、福祉六法から八法へ、そして社会福祉事業法から社会福祉法へと改革されるなかで、あらためて人権保障のシステムが問い直されてきています。

40年間にわたる私の社会福祉学の取り組みは、こうした時代の大きな変化と軌を一にしています。時代が社会福祉を求めているのだとすれば、その理念は何か、どのような施策として具体化すればよいのか、ということが私の一貫した問題意識でもありました。21世紀は「共生」「共創」「アジア・太平洋」の時代だと言えます。また「人権の世紀」(生命の尊重)でもあります。人間の英知を創造的に結集していく時代になりました。

私は仲間たちと共に、21世紀を展望したOECD編『ケアリング・ワールド—福祉世界への挑戦—』という著書を翻訳し、刊行いたしました。その内容はOECD諸国の社会保障制度のみならず、女性・児童・労働など広範囲な政策について比較検証し、近未

来の世界のあるべき方向性を展望したものです。

世界の現実を見渡せば、戦争や貧困、犯罪や差別などが蔓延しています。それを緩和・克服していくために、たとえ精力的に「福祉国家」を形成しようとしても、経済的・政治的・社会的な障壁は大きく、その達成は容易ではありませんでした。20世紀は「福祉国家への挑戦」を重ねてきた時代であったと言えるでしょう。

前述の「ケアリング」という言葉は、「この地球に生を享けたすべての人が世界市民として最低生活(ミニマム)の権利保障」がなされるような世界(world citizenship)を意味しています。21世紀を展望したとき、各国の利害と格差の中で揺れてきた福祉国家ではなく、新たなビジョンとしての「ケアリング」つまりは「福祉世界」を創造していくことはできないかと考えるのです。

大学院時代、恩師は私にこう教えてくださいました。「福祉学は人類の総合的な最終学問になるだろう」と。その言葉がいまも私の心に深く刻まれています。少子高齢化は地球規模で洞察・共創していく時代です。社会福祉の歴史や原論の研究をとおして、生きることの豊かさを実感できる「福祉世界」の創造に向けて、ささやかながら研鑽を重ねていきたいと願っています。

「福祉世界」研究所・主幹





シオンバーグ黒人文化研究センター

短期大学部 教授 進藤 鈴子

▼シオンバーグ黒人文化研究センター



シオンバーグ黒人文化研究センター (Schomburg Center for Research in Black Culture) は、アフリカの国々の人々と世界中に離散したアフリカ系の人々に関する文化的資料を専門に保存し研究者たちに提供しているという点で、世界でもトップレベルの研究所である。センターの収集には芸術作品、録音テープ、ビデオテープ、書籍、原稿、映画フィルム、新聞、雑誌、写真、出版物、音楽ディスク、楽譜などが含まれ、その総数は一千万点に及ぶ。全世界からの研究者を受け入れる一方で、公開朗読会、討論会、美術展、演劇の上演なども主催し、地域住民に無料で公開している。

シオンバーグセンターは「鋼鉄王」として知られるアンドリュー・カーネギーの寄付により、ニューヨーク市立図書館 (NYPL) の分館としてマンハッタン北部のハーレム地区に建設された。創設時の名前を「135番街分館」といい、開館式は1905年7月14日であった。

135番街分館の開館とハーレム地区が黒人街へ

と移行していく時期とはほぼ一致している。1904年から始まった大移住 (Great Migration) により、多くの南部黒人がハーレムへと大挙して押し寄せたからである。135番街分館はハーレムの黒人共同体と共に歩み始める。NYPLが初めてアフリカ系アメリカ人の司書を採用したのはこの分館であった。また、それまで論外であった「ハーレムのアフリカ系アメリカ人」と題する展示は1921年から毎年恒例となった。1924年には「黒人の文学、歴史、出版物」部門が創設された。この頃開花した「ハーレム・ルネッサンス」と呼ばれる黒人文化は、黒人意識高揚のために一連の活動を続けてきたシオンバーグの功績に負うところが大きい。

1926年、プエルトリコ出身の教育者であり社会改革者であるアルトゥーロ・アルフォンソ・シオンバーグ (Arturo Alfonso Schomburg 1874-1938) の収藏品5千点がNYPLにより買い取られ、「黒人部門」に寄贈された。シオンバーグは小学校の白人教師から聞いた「黒人には歴史もなければ、英雄もない。まして、重要な事件も偉業さえない」という主張に長い年月をかけて反証し、その努力が報われることになった。1973年に施設は現在の名前となった。2010年時点での年間来訪者数は12万人である。

昨春訪れたハーレムは1990年代以降の市政の恩恵を受けて近代化と高級化が進み、時代の変化を感じさせた。

山崎 玲美奈・金南 昶 著
『起きてから寝るまで
韓国語表現 700』
(280 頁) (アルク)



経済学部 講師
田村 善弘

外国語の学習が進んでくると、「これは〇〇語では何て言うんだろう?」といった疑問が出てきます。私自身は韓国語の専門家ではありません。ですが、韓国語と関わりをもって10年以上になります。こうした場面に直面することは日常茶飯事です。



そこで、この本です。朝起きてから夜寝るまでに使うであろう表現が700用意されています。場面も、朝、通勤、家事、オフィスで仕事、IT ライフ、家でくつろぐ、お出かけ、外食、健康・ダイエット、夜という10の場面が用意され、それぞれの場面で使える表現が用意されています。このなかの表現には、実際に現地でも日常生活において使われる表現がたくさんあります。

例えば、日本語での「(文字化けのときの) 化ける」と「(manacaなどをチャージするときの) チャージする」という言葉ですが、韓国語ではどのように言えばいいのでしょうか。日本語をそのまま訳しても大丈夫なのでしょうか。本書によれば、それぞれ韓国語で「壊れる」と「充電する」という単語を使うとあります。そのまま訳しても通じなくはないかもしれませんが、せっかくなら自然な表現を覚えたいものです。日本語と韓国語はよく似た言葉といわれますが、実際にはこのように異なる言葉を使うこともあります。

私が韓国語の勉強を始めた当時に比べると、韓国語を学ぶ人も、そして教材も爆発的に増えています。ただ、こうした中級レベルの教材は比較的少ないというのが現状です。本書は韓国語を勉強している人、なかでも中級に進んでいる人、留学を考えている人にお勧めしたい1冊です。

古賀 茂明 著
『官僚の責任』
(232 頁) (PHP 研究所)



法学部 准教授
川上 博英

本書(『官僚の責任』)は、昨年5月に刊行されてベストセラーになった『日本中枢の崩壊』に続いて、同著者が執筆した、いわばその第2弾といえるものです。著者の「古賀茂明」さん。名前を聞いてどんな人か顔が思い浮かぶ人がかなりいるのではないですか。私も昨年の半ばくらいから、彼が日曜日の朝などに放送されているテレビの政治討論番組にゲストとして出演し、日本の政治の現状などについて批判的あるいは改革的立場から意見を述べているのを見て関心を持つようになりました。なぜなら、そのとき彼はまだ現役の官僚だったからです。公務員が政策や行政のあり方について批判的意見をテレビで話すなど普通はないことなのです。皆さんがネットでよく閲覧しているYouTubeで「古賀茂明」、「日本中枢の崩壊」などを検索すると、関連する動画が5000件を超え、「古賀茂明氏が語る 日本中枢の崩壊」の動画には10万近くのアクセスがあります。どうです、ちょっと興味が湧いてきましたか。



さて、この本の内容ですが、まさしく官僚社会にいた人物が、政治家の無能ぶりに加えて、政治が機能しないのは国家・国民のためにその能力を発揮しなければいけない官僚がその役割を果たせていないことを批判するものです。読み終えると、きっと「これから日本はどうなるんだ」という気持ちになることでしょう。若者が政治に関心を示さなくなっているといわれる今日、それではいけないことに気がつくはずですよ。

読書ガイド

読書ガイドでご紹介した本は図書館にあります。ぜひご一読ください。

ダニエル・キイス 著 小尾 芙佐 訳
『アルジャーノンに花束を』
(485 頁)
(早川書房 ダニエル・キイス文庫1)



人間生活科学部 講師
伊藤 時彦

西谷 修 編著
『“経済”を審問する』
(299 頁) (せりか書房)



短期大学部 教授
船井 廣則

この紹介文を書くにあたり、文庫本を購入し読み直してみた。初めて出会って40年以上経過しているのに、読後感は損なわれることがなかった。

この小説との出会いは、学生であった頃、清水義範を中心とした同人誌の活動に何となく参加していたとき、書評会（読んで面白かったものを紹介する程度のものだが）で、こんなSF小説があると、たぶん清水だったと思うが、紹介されたのがきっかけだった。

ストーリーは、知的障害者である青年（チャーリー・ゴードン 37歳）が知的レベルを高めたいと希求し、進んで被実験者として脳の手術を受ける。その結果、IQ68から超天才的レベルまで飛躍的に変化するが、それは一時的なものであり、急速に衰えていく過程を描いたものである。

単純化すればこれだけの話であるが、巻頭に引用されているプラトンの『国家』の言葉が暗示しているように、闇の中から光の中へ、そして再び闇の世界へ戻っていくチャーリー自身の心情と回りの反応が、まるで実体験であるかのごとく見事に表現されている。また、彼の経過報告（3月3日から11月21日まで）という形で、彼の目を通して一人称で描かれていることが効果を高めているといえる。

さらに、彼の変貌を端的に表す語句や文体の変化を忘れてはならない。訳者が漢字仮名交じり文という日本語の特色をいかに発揮しているのには、感心するばかりである。

冒頭の「けえかほおこく1—3がつ3日」から次第に変化し、また元に戻る。原文では、「PROGRIS RIPOIT 1 MARTCH 3」のように綴りの誤りなどで表現しているが、私としては日本語訳の方が素直に共感できる。

さて、題名にある「アルジャーノン」とは？興味を持たれた方はご一読ください。

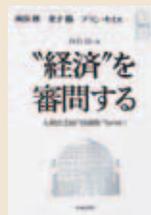


なんとも挑発的なタイトルではある。経済にクォーテーションマークが付されている。とすれば、この「経済」は一般的な経済ではなく、特別な意味付与がなされているとみなければならぬだろう。

編著者の西谷修は東京外大大学院教授で、フランス現代思想が専門である。著書は多数あるが、ここに取り上げた『“経済”を審問する』は最新刊（2011年10月現在）である。バタイユの優れた研究者である西谷は、数年前から、これまでの「共同体」や「戦争」を経て「経済」に視線を移しているのだが、いつもの鋭い思考を本書でも随所で展開している。

本書は三部構成である。（Ⅰ）「経済学は何をしてきたのか」では、「テロとの戦争」と「グローバル経済」の関係を解き明かしつつ、今日の経済学は単なる社会科学ではなく、いまや世界の人間の生き方を決めるほどの強烈な造形装置であり、いわば「思想」となっているとして、そうしたことに無自覚な経済学者を痛烈に批判している。（Ⅱ）「ウォール・クラッシュのさなかに」はTVのコメンテーターとしても知られ、今回の金融危機の到来を的中させた経済学者金子勝の講演とシンポジウムの記録とからなる。（Ⅲ）「“経済”を審問する」には、フランスの知的共同体 MAUSS (Mouvement Anti-utilitariste en Socials') のメンバーであるアラン・カイエの講演主旨『反・功利主義と贈与のパラダイム』と、彼を囲むラウンドテーブルの記録、そしてカイエの関連論文2編が収められている。

自然と人工の大災害、あの3・11から一年を経たいま、再生すべき社会のあり方を模索する上で本書は確かな道筋を指し示しているだろう。本書が多数の読者を得ることを心から願う。



池井戸 潤 著『下町ロケット』を読んで

経営学部 長尾 憲治郎

私が読んだのは「下町ロケット」という本です。著者は池井戸 潤氏、2008年～2009年に「週間ポスト」に連載されていた作品です。

私は本をよく読む方ですが、今回のような本は初めてでした。この本は第145回直木賞を受賞しており、昨年、TVドラマ化される程の人気作です。

物語は、かつて宇宙開発機構の研究者としてロケット開発を行っていた主人公（佃 航平）がロケットの打ち上げ失敗の責任を取り、研究員をやめ、父親が経営していた精密機械製造業に入ります。そして父親の跡を継いで社員数200人の小さな会社を経営していくことになりました。そんな中、主人公の元に一通の訴状が届きます。それはライバル会社のナカシマ工業が、特許権の侵害だと損害賠償

を求める内容でした。佃は法廷闘争に巻き込まれ社会的信用を失い、会社存亡の危機に立たされることとなります。

これはまだ序章の内容です。ここから中小企業VS大企業の特許技術を巡る事になっていきます。

この作品を読んでいる中、物語の中盤ですっかり物語にのめり込んで応援していました。読み終わった時には爽快な気持ちでした。

もしこの文書を読んで興味を持って頂いた方がいるなら是非お勧めする一冊です。この作品はテンポよく話が進みますのであまり本を読まない方や読むのが苦手な方でも読みやすい作品だと私は思います。



正田 杉 著『消費者の権利(新版)』を読んで

経済学部 ホアン レー マイ

「消費者の権利」という本を読みました。留学生の私は今消費者問題を学んでおり、卒論のテーマとしています。はじめはこの本の題名にちょっと硬いという印象を受けましたが、読んでみると、自分の知らない知識をたくさん得ることができました。

「消費者の権利」とはどんなものか？著者は、消費者の特質は「生身の人間」だということから出発し、安全の権利、正確に表示させる権利、情報の提供を受ける権利などが消費者の基本的な権利であり、それは現代社会の基本原則にもつながると主張しています。こうした「消費者の権利」は歴史の流れの中で形成され、消費者基本法にも明文化されるに至っています。

私たち消費者は、この「消費者の権利」に

守られていると同時に、消費者運動などを通じて、権利を自ら守っていかなければいけません。例えば、商品・サービスに関してトラブルに遭ったときに、これをうまく解決する仕組みを利用したり、消費者にとって有益な情報を自ら主体的に入手したり、きちんと活用するなどです。一方、消費者行政は消費者の権利が確実に実現するように積極的な役割を果たしていかなければいけません。こうした「消費者の権利」を中核にして、消費者・事業者・行政の責務や役割が緊密につながっています。

この本を読んで、これから自分の卒論を書きあげていく上で、本質的な知識が身に付き、大変役に立ったと思います。



野村克也 著『野村ノート』を読んで

法学部 白井 芳樹

著者の野村さんは、言わずと知れた東北楽天ゴールデンイーグルスの監督です。当初本書を見かけたときは、タレント本のように、あまり読みたいとは思いませんでした。しかも、テレビで見る野村監督は、愚痴ばかりでなんだか怖そうでもあります。

ところがあるとき、野村監督のインタビューを聞くことがあり、人材育成に関する発言に、かなり共感できる部分がありました。しかも本書は、2005年に発行されてから、すでに14刷となっています。きっと良い本なのだろうと思い、本書を読んでみることにしました。

野村さんは、南海ホークス時代に監督兼選手を8年経験し、1973年には優勝もしています。若い頃からこれほど長く監督を務めたのですから、指導者としての意識は、ずいぶん前から持っておられたのだと思っていました。けれども、本書によれば、指導者としての視点を持ったのは、ヤクルトの監督に就任する1990年まで行っていた野球解説者の仕事があったのだといいます。

そしてヤクルトで実践し、成果を上げた「プロ野球監督のあり方・原則」をまとめたのが本書です。内容は100%野球の話ではありますが、見出しは組織論、リーダー論そのものです。

これらは、野球をやらない人には無関係のことと思われるかも知れませんが、そんな狭い話では

ありません。野村さんが言っているのは、相手のことも自分のこともきちんと分析・理解していなければ、良い仕事はできない、ということなのです。これはあらゆる仕事に通じることでしょう。

野村さんは、選手としても監督としても、輝かしい成績を残しており、本書の巻末にもそれが詳細に掲載されています。にもかかわらず、本書では、それらについては一切語られていません。むしろ、失敗談の方が多くくらいで、野村さん自身が野球のルールを知らず恥をかいたこと、日本シリーズで采配ミスをして負けたことなどがさらりと書かれています。失敗からの方がより深く考えられる、ということなのでしょう。その潔さといえますか、自己認識の厳しさにうなりました。

職人気質が多いプロ野球選手は、自分ひとりですうまくなった、自分で勝てたとすぐ錯覚するが、人は全然そう思ってくれていないことが往々にしてある。評価は、人が下した評価こそが正しいのだ。自分が思うほどには人は思っていないということを、どうやって選手に分からせるか。これが監督の仕事である。

リーダーのあり方を考えさせられた一冊でした。



沼田まほかる 著『猫鳴り』を読んで

短期大学部 水谷 友美

『生きる』とは何か、〈死ぬ〉とは何か。一匹の猫と関わる中で、人々はそれが何かを知る。

この小説は、ようやく授かった子どもを流産し、悲しみから抜け出せないでいた中年夫婦が一匹の子猫を見つけるところから始まる。妻の信枝は流産したこと、幼い命というものに嫌悪や恐怖を抱いていた。捨てられていたその子猫に流れてしまった自分の子どもを重ね合わせ、何度も目の届かないところへ捨てるが、その度に子猫は彼女の元に戻ってきて……。

モンと名づけられた子猫と関わり、少しずつ歩み始める夫婦の姿が描かれる第一部、幼児や小動物に対して憎悪を抱いていた男子中学生が、ペンギンと名づけられた子猫を世話することで自分と向き合う第二部、妻に先立

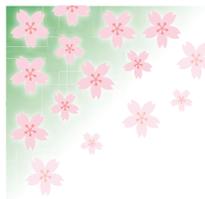
たれた男が老いたモンと最期のときを過ごす第三部からなる。

猫好きの私にとって、第一部の子猫のモンが捨てられるシーンはとても辛いものだった。何度捨てられても、傷だらけになって這いずってでも信枝の元に戻ってくる蒙の姿には涙せざるを得ない。

とはいえ、第一部の辛さを耐えるだけの価値がこの本にはある。読むことによって、猫のモンとモンに関わった人々の「生と死に向き合う姿」から、命の尊さについて改めて感じることができよう。

ペットを飼っている人や動物好きの人には、大きめのハンカチかティッシュ1箱を用意して読むことをおすすめする。





新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

新入生を対象に館内ツアーの申し込みを受け付けています。

1人でもグループでもかまいません。普段入れない閉架書庫などへもご案内いたします。気軽に図書館カウンターへお申し込みください。

■ 神山裕右著『炎の放浪者』 新刊発行!

最年少で江戸川乱歩賞に輝いた、本学卒業生神山裕右さんの待望の第3作目『炎の放浪者』が講談社より発行されました。

図書館3階に神山さんのコーナーを設け第1作目『カタコンベ』、第2作目『サスツルギ』と共に並べてあります。ぜひ、ご一読ください。



■ 学生選書の会

2月6日、“学生選書の会”のツアーを名古屋の書店で実施しました。参加した学生さん達は広い店内でゆったりとした雰囲気の中、選書を楽しんでいました。

今回選ばれた本は3階カウンター前“学生選書の会”の本棚に、選んだ学生さんの紹介文と共に置かれます。

皆さんが読んでみたい本にめぐりあえるかもしれません。ぜひ一度棚を見に来てくださいね。

さて“学生選書の会”ってご存じですか。これは学生さんが私達図書館職員と直接書店に行って図書館に入れたい本を選んでくる会の事です。年2回募集していて参加した学生は毎回とても楽しんで本を選んでくれています。次はあなたも参加してみませんか。



写真提供：クリエイトセンター

■ 図書館1階ホールでの展示についてのご報告 (平成23年度)

出品者	展示品
鳴子踊りチーム“笑”(犬山市民)	写真他:10周年記念公演～お手を拝借～
ニッコールクラブ・名古屋キャッスル支部	写真展:覚王山から東山
図書館(所蔵本)	七夕関連資料・笹飾り
CAN缶アートG(NPO法人)	アルミ缶アート
ニッコールクラブ・名古屋キャッスル支部	写真展:大連・バルピン
附属市邨幼稚園	絵:市邨園児の作品展(3~5歳児テーマ別)
図書館(所蔵本、個人資料など)	クリスマス特集
教員	似顔絵(映画スター)
犬山南高校(20名生徒・2名教職員)	絵画:美術部作品展

皆さんも作品展開いてみませんか。

図書館だより Vol.63 2012.4

発行所 名古屋経済大学 図書館 〒484-0000 愛知県犬山市樋池61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)
名古屋経済大学短期大学部 ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>
発行 年2回
印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171